

「御供田地区に残る河川の跡」



できた川中新田の一部です。ちなみに、堺屋太一の時代小説「俯き加減の男の肖像」では、主人公が御供田村を拠点に深野池の開発を指導する様子が描かれています。

さて、三箇大橋から恩智川堤防に沿って100メートルほど東へ行き、JRの高架下をくぐると、再びカーブを描いた道が現れます。この道は、昭和40年代に付け替えられるまで恩智川が流れていた場所です。この道の歩道側がかつての古堤街道で、現在は桜見物など市民の憩いの場として利用されていますが、降雨時には雨水貯留池として水の防止に貢献しています。

歩道を歩いて行くと、間もなく右手に御供田地区の氏神・八幡神社の社殿が見えてきます。境内の南側には近世以来の旧家などが並ぶ歴史的町並みが残されていますが、これらの旧跡は次回ご紹介します。
(生涯学習課)

前回紹介した三箇大橋を通る道は、緩やかなカーブを描きながら南下し主要地方道大阪生駒線(阪奈道路下り線)まで通じています。かつてこの道は、現在の近鉄河内花園駅(現・東大阪市)付近で玉串川から分岐し、深野池に流れ込んでいた吉田川の川筋でした。現在は、この道を挟んで西側が川中新町、東側が御供田地区となっています。

御供田地区は、吉田川と恩智川の堆積作用によってできた地域とされ、かつては両河川に挟まれながら半島のように深野池に突き出ていたそうです。

元禄2年(1689)に御供田村を訪れた貝原益軒の「南遊紀行」には、当地から深野池まで漁に出る人々の様子が記録されていますが、宝永元年(1704)の大和川付け替え後は、下流の吉田川や深野池が次々に開発され、御供田村周辺は新田地帯として生まれ変わりました。御供田地区に隣接する川中新町も、このとき吉田川跡に



吉田川跡を通る道路
(コミュニティバス御供田西停留所付近)



恩智川跡の道路と雨水貯留施設